

最近禪宗學界展望

禪宗學之部

(自昭和十一年一月
至昭和十二年十二月)

單行本

禪と念佛の心理學的基礎

鈴木 大拙著

(昭和十三年四月大東出版社)

本書は一九三三年に刊行された *Essays in Zen Buddhism*

Ⅱの一部の邦譯である。此書の内容は二つの意圖を持つ。即ちその一は、禪經驗に於ける目的と方法の要素たる、悟と公案の心理學的考察、詳しく言へば、悟の本質と開發過程を心理學的に説明する事であり、その二は、禪に於ける看話工夫と、淨土門に於ける念佛稱名とに心理學上共通なる地盤を發見する事である。然して是等の意圖は、豊富なる資料の實證により見事に果され、同時に禪と念佛思想は始めて系統ある心理的發達史を持つたと言ひ得やう。

先づ禪に關しては、本書の隨處に見らるゝ多くの綿密なる觀察を洩なく紹介する事は容易でないから今その主なるものを抜

粹しやう。悟は禪の究極目標であり禪の全てであると言つてもよいが、その心理學的特徴として、非合理性、直覺的瞥見、權威性、肯定、彼岸意識、非人格調、高揚感、瞬間性等が擧げられる。然してかゝる禪經驗を決定す可き要件としては、一、豫備的な智的行装—或は哲學的或は自己反省的な動機は多分に智的なるを特色とする。二、自己を超脱せんとする強烈な願力、

三、師の導きの手、四、未知の領域より來る最後の心的隆起、等が必要であるが、多くの獨創的天才の輩出せる禪勃興期にありては、修業者の熱烈なる求道心と能動的創造的精神により、何等特別な組織的指導方法を考慮せずとも、師の應機の一捧一喝はよく彼等をして命根を斷じ悟境を打開する事を得しめたのであつた。然るに六祖惠能より二三百年を経て事情は變化し、看話制度の發明と採用は必然となつたのである。即ちその事情は一、禪本來の貴族性はそのまゝに放任するときやがて自滅に向ふ恐れがある。茲に於て看話は禪の通俗化の作用をする二、禪は次第に創造の源泉を枯竭するに至つた爲め、何等か禪的意識を強烈に振起し禪經驗の成熟を促進す可き革新的方法を必要とした。

三、創造的自主的能動時代の過ぎ去ると共に話頭、機緣、問

答等の夥しき資料の集積は、やがて禪の直接經驗に有害なる智的解釋を招致するに至つた、看話工夫は是等主智主義の發生を防止する機能をもつ。

四、禪史の初めより禪の生命經驗を脅威した看靜默照主義の蔓延に對抗し、その暗黒裡より救出し、積極的大疑意識を振作せんがために看話を必要とした。

而して看話の心理的過程は次の如くである。

一、公案は禪意識の醸成をいやが上にも強度化するために與へられる。

二、推理的智的作用の活動を休止せしめ、より深奥な意識の活動を促す。

三、大疑情、即ち人格の基調をなす情意的全能力を擧げて公案の解決は向はしめる。

四、精神的統合が最高頂點に達する時、無記的意識狀態を現出する。是は往々宗教心理學者によりて誤認せらるゝ恍惚と明白に區別せられねばならぬ。

五、かくて忽爾に大轉回を行じ、夢想だにせざりし新生命の源泉が湧き出ると共に、公案はその秘密を全部讓渡する。

而して、篇中至る所に於て悟と看靜默照主義との嚴密なる區別

を強調されてゐるのは吾人の最も注意すべき點であらう。今之を摘記すれば、

一、悟は單なる靜慮主義の如き受動的傾向の產物に非ざる事は悟の刹那に附隨する叫聲、聲音、動作等により推測し得る悟は十分積極的な大疑情によりてのみ可能である。

二、悟の直前にある無記的意識は宗教心理學に所謂恍惚エクスタシイと區別されねばならぬ。恍惚は受動的觀照の結果であり、心的諸能力の停止を意味するが、禪意識に於ては、人格構成の根本的能力が最も熾烈に活動するとき現前する意識態であり、經驗的意識の彼岸に向つて將に突破せんとする極點である。恍惚にはかゝる轉移がなく、嶮崖に手を撒するの危険性もない。

三、自己暗示自己暗示と區別されねばならぬ。自己暗示には何等の智的先行條件なく、何物かを探究せんとする強烈なる意志もない。始めから一定の命題が與へられ、暗示され、従つて始めから結果が豫定されてゐるのであつて、未知の領域に向つて百尺竿頭進一步する禪經驗と根本的に相異する。

四、看話工夫に際し、集中(Concentration)なる語が屢々使用されるも、この作用は不可避的ながら附隨的なもので、

その本質的なるものは、公案の意味に徹せんとする意志又は探究心(疑情—工夫)であつて、之が強固に不斷に活動する時は、公案は必然的に中絶せず執持せられ、他の全ての觀念は自然に意識の領域より掃蕩される。かゝる掃蕩それ自體は目的でなく副産物であり、この點が單なる集中、或は印度的禪、**那**と異なる所以であると。

次に後篇に於ては、淨土三經、般若三昧經、文殊師利所說般若經、及び道掉の安樂集、善導、源信、法然、親鸞、一遍等の著書を引用しつゝ、詳さに念佛——佛を念ずる——より稱名への心理的推移をたどる。稱名は念佛の具體化であると共に純粹化(佛の相好等を念ずる事は多くの幻影に陥り易い)であるが、等しく稱名と言ふも、名號自體にある奇蹟的な力を認め陀羅尼の効果を信するものと、稱名の行に於て或る心理的過程を成就せんとするものとがある。後者は特に禪家の採用する所であるが法然に於て「念聲是一」とされ、觀佛と稱名が全く一致するとき、この兩者を結ぶものは論理的關係ではなく或る心理的體驗の事實が豫想されねばならぬ。この色彩は特に一遍の神秘的教義に於て濃いが、すべての宗教には根本に神秘經驗がなければならぬ。名號が意味をもたぬ一の陀羅尼として深心に稱へらる

ゝ時、經驗的意識の條件なる根本的二元性は抹消され、名號と我とは一元となりて意識の深淵に下り、忽爾として覺悟し來れば彼は一つの思念を具する。それは本願の信であり往生の自覺である。かゝる心理的體驗の事實は禪に於ける看話工夫と同一の過程であり、一見兩極端の教義でありながら等しく佛教の流れをくむ所以のものは、かゝる共通なる地盤をその基礎に存するが故と言得るであらうと。

最後に附録として禪經驗の諸形相—十八項が採録されてゐる

禪の概要

(禪の講座第一卷昭和十一年 月春秋社發行)

本講座は禪の達意的解説を主眼とするものであるが、その中の組織的研究なるものを紹介すれば、

「禪の心理學」、黒田亮禪を常人の窺知を許さざる神秘經驗とするのは、禪を一種の異常心理化するものであり、之は禪を職業とするものゝ爲めにする所あるのであつて、かゝる迷妄を排し民衆の共有財産とする意圖の下に正常心理學の立場に於て考察する。第一に禪の目的たる悟に到達する方法として坐禪と公案があるが、之等は何れも悟との間に何等論理的必然性なく、唯傳統と職業家の神秘化によつて不可缺の過程と信ぜら

れるのみであり、公案禪の流行は修禪の職業化に伴ふ禪の墮落である。第二に、然らばかく坐禪及び公案と切離して考察された禪の本質は何であるかと言へば、信心銘に所謂揀擇の心而去り至道の悟に入る事である。換言せば二見の差別觀を捨離して絕對の本質直觀に入る事であり、かゝる差別觀と絕對觀はすべての日常現象に具はる見方であつて何等異常なものではない。例へば對人關係に於ては代償觀念を拂却して他のために盡す事であり、對物關係に於ては一切の差別的揀擇心を離れ物自體の本質を正視する事であり、仕事に於ては衆中一慣れ一ゆとの過程に於て到達する私の所謂覺の現象であると。尙此の根本的立場はさきに公にされた「勘の研究」に就いて見る可きであらうが、禪に對するかゝる見方は十分なる批判を受けねばならぬであらう。

「禪の論理學」(柴野恭堂)凡そ論理とは知識の構造を秩序附け眞理に至る道を示すものであるが、眞理を知るとは知識と實在が自覺の世界に於て一如となる事であり、眞理が眞に具體的なるためには必然性と現實性即ち理と事が不二となる如き直接經體の事實を直證しなければならぬ。禪の論理はかゝる自覺の論理であり生命の論理である故に、生命及び自覺の意義を明か

にして始めて禪の本體論(論理學)は成立するのである。形式論理はその抽象性の故に、辨證法は生の眞相を矛盾を推進力とする生々發展の動態に於てとらへんとする點に於てより現實的であるが、尙觀念辨證法は思辨の理念の域を脱せず、自然辨證法は人間を自然必然的存在とする事によつて却つて具體性を失へるの故に、共に眞の生命の論理たるを得ない。思ふに生命は自己牽引性と自己反撥性の二面の綜合作用であつて、前者は自我又は自覺の側面であり、後者は共同社會意識又は文化意識の側面である。前者は後者の主體となり、自我と社會の對立を統一するものであり、それ自體は對象化されず不可知である。禪はかゝる自覺を深め純粹化して之を立脚地として眞の自我の獨立と安定を得んとするものであるが、通常は兩者分裂して當爲的自我と現實的自我即ち共同社會意識との對立となる。理想主義は反規範的なるもの、克服によつて統一を見出さんとするも、規範反規範の對立を本來の前提とする理想主義的方法に於ては解決されぬ。却つてかゝる對立の底に無差別なる一者を考へる事によつて理想主義は成立するのである。又、禪は救濟教の如く媒介の即の論理によらず、不二の即の論理に立ち、動靜一如の境地にありて一切の差別と矛盾を超え、之を肯定する。

禪の論理は歴史的生の論理であり眞に自由なる行動の論理である。

他に「禪の宗旨」(澤木與道)等がある。

禪の本義 (禪の講座第二卷)

「看話禪」(日種讓山)一、序説、二、禪の體性、に於て禪一般の體相を多方面より考察し、三、禪と公案、四、話頭に於て、看話の意義と目的及び禪一般との關聯を明かにした。

「默照禪」(岡田宜法)所謂默照禪の提唱者として宏智の史實と禪風を考察し、大惠の攻撃にもかゝはらず、その禪は大乗佛教の人性觀に基く達磨正傳の禪なりとし、その著、默照銘と坐禪箴を略解して之を禪定第一主義として特色附けた。但大惠の默照禪排撃の眞意が全く理解されてゐないかに見えるのは如何であらうか。

他に「禪宗の信仰」(天軸接三)「悟の心境」(日種讓山)「野孤禪」(北村讓二)「坐禪の仕方」(伊藤道海)等がある。

禪の生活 (禪の講座第三卷)

「禪的經濟生活」(福場保洲)禪宗教團に於ける經濟生活はその精神を全く源始佛教々團にくむ事を明かにし、生産消費勞動等の經濟的諸觀念を考察し、最後に經濟に對するかゝる態度が

在家社會に及す可き影響を検討した。

他に「禪の生活」(大峽竹堂)「禪の處生道」(石井光雄)「家庭の禪」(中根環堂)「西洋人の見たる禪」(鈴木ビートル)等がある。

研究論文

「聖の否定としての禪」

久松眞一

(理想第七十五號禪の研究特輯)

近代宗教學の動向は「^{ヘイリツ}聖的」の獨立性確立に向つて進み來り終に辯證法神學に至つて、「^{ヘイリツ}神聖」なるものは人間に對して絶對他者的なるものとなり、兩者は懸絶的結合とも言ふ可き關係とされる。然るに禪はかゝる懸絶的超越的客觀的なる「^{ヘイリツ}聖的」を否定し吾々人間の外に別に佛を認めない點に於て「無聖」的なる宗教と言ひ得る。之を象徴するすべての禪藝術は完全の否定、つや消しとして理解さる可きであらう。しかし禪は素朴なる人間中心の理想主義ではない。それは無懸絶的結合とも言ふ可く、又生佛不二と云ふ點よりすれば結合と云ふよりは「^{ヘイリツ}」であり「無」であり、非合理的合理、超越的内在の立場と言ふ事ができるであらう。是れ元來大乘佛教の立場である。

「禪の哲學的意義」秋山範二(同上)眞の坐禪は修證不二でなければならぬ。坐禪によりて悟に達せんとするのは、所謂揀擇

の心であり馳求の心であつて、坐禪の内に對立的差別を認むるものであつて、その事自體根源的なる染汚心を含み、かゝる時々拂拭漸進主義的禪を以てしては最後の一步を越ゆる事は出来ぬ。兩者の間には質的斷絶的差別が付在し、之を無みするものは連續的等質的努力ではなく異質的非連續的飛躍である。即ち一を捨て他を執るのではなく、我執滅するとき此方はそのまゝ、彼方となるのである。求むる心を滅すれば何故に證が得らるゝか。こゝに禪と信との問題がある。禪の存在觀によれば本來心佛衆生三無差別である。求めずして自心の裏に佛の三身圓滿に具足すと決定して信ずる時、このまゝの我に於て何の缺くる所の消え去つた時、信の成就が證を得た瞬間となる。我を全體の中に擲ち去る事によりて全體なる佛と一致する、こゝに宗教的對虔の本質をなす信の深義がある、これ因果一如、修の中に證を具ふる坐禪であり、迷悟にかゝはらず佛祖の行持とする眞正の坐禪である。

「新日本哲學と禪」山口等澗(同上)「東洋思想と西洋思想との實踐的媒介としての當來の日本哲學の立場」なる田邊元博士の言葉を引用して、禪こそその媒介たる可きものとして、大い

にその意義と使命を強調する。

「佛教に於ける禪の地位」増永靈鳳(同上)佛教に於ける禪定の意義と特色を源始佛教より大乘佛教への展開に於て尋ね、それは更に支那に於て獨特の性格を大成し、道元の禪が更に之を日本化するに至れる所以を考察した。

この特輯號には他に「曹洞宗と臨濟宗」大峽竹堂「悟りと公案の意義」鈴木大拙等がある。

「眞佛の所在」久松眞一(禪學研究二七號)眞の佛は何れに所在するであらうか。この疑問を無分別的禪問答的に解決せんとするのでなく、極めて分別的ディアロギア的に推究しやう。かゝる間に妥當すべき答を祖録の中に探るに、或は空間の中に、或は時間の上に所在する如き感を與へる語を見るが、固より眞佛を時空の中に限る事は出来ぬ。

最も多いのは之を心にありとするものであるが、その心たるや時空の法則裏にある心理學的な心を以て目する事は出來ず、又意味的價值的論理的な精神でもない。かゝる精神も宗教的には一念の無明所生であり眞佛は一念不生の所に求められねばならぬ。眞の佛は無心としての眞心、大死底の自己である、それは決して對象化されず對象を持たぬ非ノエマ、ノエジス的覺で

あり、了々常知なる自己である。眞佛はかゝる靈覺の心の上に
求められねばならぬが、しかもこの心の「上に」或は「内に」
在るのではない。在所即眞佛である。

「無聖なるものに就て」飯田玄猷（禪學研究二七號）ウインデ
ルバンド、オットー、辨證法神學、更に淨土眞宗の教義に就いて
超越的「聖」概念確立の過程を見、最後に小室六門集中「血脈
論」に於いて、かゝる「聖」の超越性を否定する内在的聖「無
聖」の思想に禪獨自の性格を窺はんとするもの（次號につゞく）
尙他に

「禪宗學」神保如天（ビタカ四ノ八）

「禪の哲學」鈴木大拙（理想六十四）

「禪の論理的象徴的形態」山口等潛（哲學雜誌昭和十二年八、
九月號）

等の論文が發表された。（以上）

（木村靜雄記）